

常設展示 『湖国めぐる美術の旅』 鑑賞案内

ごあいさつ

日本一の湖、琵琶湖に代表される近江・滋賀の風景は、古来、多くの芸術家たちを魅了してきました。江戸時代に京都の文化人たちによって生み出され、浮世絵版画によって広く親しまれることになった「近江八景」がその好例です。

近代になると近江八景など伝統の画題にとらわれず、日本画家や洋画家たちが湖国滋賀のさまざまな風景にそれぞれの魅力を見出しました。湖南では川辺や湖岸の四季おりおりの風景、湖東では水辺から遠望したのどかな景色や伝統的な町並、湖北では雪をかぶった雄大な山

や湖に浮かぶ島、そして湖西では里山の棚田や古くからの名所の姿など、多種多様な作品が描かれました。

本展示では展示室全体を滋賀県のかたちに見立て、当館が位置する大津市の瀬田から始まり、琵琶湖を反時計回りにぐるりと一周するかたちで、湖国滋賀の風景を描いた日本画や洋画、計 22 点の作品をご紹介します。本展示を機会に、皆さまが滋賀の風景の新たな魅力を発見するとともに、当館の館蔵品に新たな角度から改めて親しんでいただければ幸いです。

■ □ ■ 展示作品解説 ■ □ ■

(展示室内に時計とは反対方向に並んでいます)

① いけだ みちお びわ こちようき 池田 道夫 《琵琶湖朝輝》

太陽をとりまく薄い雲が赤、黄、緑などの極彩色に彩られる現象を彩雲(さいうん)と呼びます。琵琶湖の湖上に幻想的に広がる、朝日に輝く彩雲を描いた作品で、視点を低く取り画面の大半を空にしたことで、大自然のモノメンタルな迫力が見事に表現されています。なお湖上に浮かぶ島影と山影は、左が沖島、右は近江八幡市の長命寺山から続く奥津山。おそらく守山市のマイアミ浜近辺から東北東方向を見た風景だと思われます。この方向に太陽が見えるということは、季節は夏でしょう。

② なかじ ゆうじん せ た せきえい 中路 融人 《瀬田夕映》

瀬田川にかかる日本三名橋(諸説あり)のひとつ瀬田の唐橋付近の夕映を描いた「瀬田夕照(せきしょう)」は、近江八景のひとつとして古来より知られた絶景です。本作品は唐橋よりもさらに南の、石山寺を麓に持つ伽藍(がらん)山の向こうに沈む夕日の姿を、瀬田川の対岸である東側(左岸)から眺めて描いたものです。融人の中期の作風で、後期の単純化された半ば抽象的な画面とは異な

り写実性が強い画面構成です。ヨシ原に停泊する昔ながらの屋形船の姿が郷愁をかき立てます。

③ にしで こうふく つたえ きはん 仁志出 高福 《津田江の帰帆》

津田江は草津市北部の琵琶湖岸、琵琶湖博物館がある烏丸(からすま)半島に近い自然に恵まれた入り江で、釣りやキャンプなどが楽しめる場所です。本作品はこの入り江に停泊する、帆を下ろした帆船の群れを描いたもので、朝日に照り映えてギラギラと輝く湖面の上に帆船が黒いシルエットとなって一直線に並び、その並びが画面に奥行き感を生み出しています。絵具の飛沫を生かした大胆な塗りが、瑞々しく爽やかな朝の気配をうまく表しています。

④ かわしま ひろし やすがわ 川島 浩 《野洲川》

鈴鹿山脈に源流を持つ野洲川は琵琶湖に流れ込む河川の中ではもっとも長大で、流域に広がる風景も様々です。本作品はゆるやかに蛇行しながら琵琶湖に向かって流れる、秋の野洲川の河川敷を題材にしたもので、画面いっぱい大きくS字形を描く川の流れと、それを縦方向に貫く朝日の反映が作る太陽柱が、画面に雄大な奥行きと広がりを与えています。雲をほのかに染めるピンク色と彼岸花の鮮やかな赤色が、画面を見事に引き締め

ています。

⑤ 沢 宏毅 《近江富士》

野洲市にある三上山、別名近江富士は姿が美しく標高の割によく目立つため、近江八景のひとつ矢橋帰帆の中に背景として描かれたり、平安時代に依藤太(たわらのとうた)(藤原秀郷(ひでさと))の大ムカデ退治伝説の舞台となるなど、古くから親しまれてきた名山です。本作品は野洲川の対岸から見た三上山の姿を朝日に映えるシルエットで表現したもので、細部を思いきって省略したシンプルな構図と大胆な筆遣い、強烈な色彩のコントラストが印象的で、小品ながら力強い作品です。

⑥ 中路 融人 《風声》

大きな川の河川敷には竹林が発達していることがあります。これは江戸時代に、洪水時にしなやかな竹で水勢を殺して被害を抑えることを目的として植栽が行われたことに起因するものです。滋賀県では特に野洲川の河川敷に竹林が発達しており、本作品も野洲に取材して描かれたものです。嵐が近いのでしょうか、雲行きは怪しく、竹林は激しくなびいています。モノトーンの陰鬱な画面の中に自然の脅威と生命のたくましさなどが表現されています。

⑦ 野添 平米 《鎌掛溪谷図》

日野町にある鎌掛(かいがけ)谷は日野川の支流のひとつで、低高度でありながら高山植物であるホンシャクナゲの群落が見られることで有名です。花の美以外にも屏風岩をはじめとした奇岩が連なる溪谷美にも定評があり、平米は絵巻物のような極端な横長画面を用いて、荒々しい絵具の厚塗りと、明度差を利用した巧みな陰影表現による洋画的な表現で、この絶景を見事に表しました。透明でひんやりとした水、泡立つしぶきなど水の表現が特に見事です。

⑧ 野口 謙蔵 《五月の風景》

万葉歌人額田王(ぬかだのおおきみ)と大海人皇子(おおあまのおうじ)(天武天皇)の相聞歌(恋の歌)の舞台になったことで有名な蒲生野は、滋賀県の南東部に広がる広大な地域で、この地出身の

野口謙蔵は四季おりおりの蒲生野の自然を愛情込めて描き続けました。この絵は初夏。風薫る五月の麦畑。強い風に麦の穂が波のように揺れ、遠くの人家には鯉のぼりもたなびいています。直線を多用し、青・緑・黒といった寒色でまとめ上げたシャープな画面が見る者に強烈な印象を残します。

⑨ 茨木 杉風 《湖畔の街》

近江八幡市の象徴でもある八幡堀(はちまんぼり)は、安土桃山時代、豊臣秀次が八幡山城の城下町から西の湖を経て琵琶湖につながる運河として造ったもので、かつては町の商業都市としての発展に、近年は観光資源としての水郷風景のアピールに大きく寄与しています。本作品は八幡堀とそれを取り巻く、白壁と石垣、入母屋造り瓦葺きが特徴的な旧市街の家並みを、子どもたちが遊ぶ姿とともに描いたもので、たらし込みなど水墨画の技法が生かされた強い印象を残す作品です。

⑩ 茨木 杉風 《湖畔》

琵琶湖に浮かぶ沖島は日本で唯一、人が居住している淡水湖上の島です。本作品は近江八幡市の宮ヶ浜水泳場から伊崎寺(棒飛び行事で有名です)にかけての湖岸の民家から、夏雲が浮かぶ琵琶湖と沖島の姿を描いたものです。湖面に並んだ杭の群れのようなものは魚を追い込むための罟(えり)と呼ばれる琵琶湖の伝統的漁法です。自由奔放に描く南画であるため、一見子どもが描いた素朴な絵のようにも見えますが、夏の陽光にきらめく琵琶湖の湖面を、少しずつ濃度を変えた横方向の点描によって見事に表現するなど、実は手慣れた水墨画の技術に裏打ちされています。

⑪ 島戸 繁 《湖畔夕照》

現在の彦根港付近の湖岸から西方を望んで描いたもので、中央に見える島影は見る方向によって様々な姿に見えるという多景島(たけしま)です。淡いオレンジ色と青灰色の雲、翡翠色の湖面、それらを引き立てる茶褐色の陸地と、小品ながら色彩設計が美しい油絵作品です。なおこの時代(戦後まもない時期)には彦根漁港は湖岸ではなく、運河で内陸に大きく引き込まれた彦根城の東方にあり、この絵に描かれた風景は漁港ではありません。

⑫ 島戸 繁 《彦根城（玄宮園）》

玄宮園は彦根城の東北にある回遊式の庭園で、現在は藩主の屋敷であった楽々園とともに金亀（こんき）公園の一部となっています。入り組んだ池に幾つもの橋がかかり、全体が近江八景になぞらえた構造となっています。本作品は彦根城の天守を借景にした、新緑の眩しい時期の庭園を明るいタッチで描いたもので、静まり返った鏡のような水面、そこを横切りゆく鯉(?)の魚影、強い日差しを受けて輝く松の葉、底面が影となり周辺が明るく輝く雲など、見どころが満載です。

⑬ 小林 翠溪 《金亀城址の秋》

金亀（こんき）城とは国宝・彦根城の別名で、金亀山の山頂に造られていることからこの名があります。本作品は天守の南側にある大手門橋の方向から天秤櫓（てんびんやぐら）越しに天守を望んで描いたものと思われ、日本画の明るい発色を生かし、鮮やかな紅葉だけでなく秋の黄色い松の葉や、石垣や河原に付いた翡翠色の地衣など、上品かつカラフルな色彩感覚で手堅くまとめています。天守を頂点とするシンプルな三角形の構図が松のヴォリューム感を高めています。

⑭ 中村 善種 《冬の倒影》

作者が得意とする、虚実入り乱れたプリズムのような幻想空間で、彦根城の東方にあった旧彦根漁港近くの、運河沿いの古い町並みを題材に描いたものです。水面に水上の風景が鏡のように反射して、上下対称の摩訶不思議な光景を作り上げています。白く雪を被った屋根と黒塗りの壁がモノトーンの無機的な雰囲気を作り上げ、立ち並ぶ電柱や杭の群れが絶妙なアクセントを加えています。単なる画家の心象風景ではなく、滋賀県北部の厳しい冬の美しさも伝えています。

⑮ 沢 宏毅 《古里の山》

滋賀県と岐阜県の県境にある伊吹山は、古代の日本武尊（やまとたけるのみこと）伝説や薬草が豊富なことでも知られる日本百名山のひとつです。長浜市出身の宏毅にとって、町の東方に常に変わらぬ巨大な山容を横たえる伊吹山はまさに「ふるさとの山」でした。この山に対する郷愁と畏敬の念を表現するために、宏毅はあえて近景と中景を

省略し、満月の光を浴びて星の無い夜空に幻想的に浮かび上がる白く神々しい姿を、色彩を抑えたモノトーンの画面で堂々と描き上げました。

⑯ 安田 謙 《雪景伊吹山》

晩年の画家はしばしば京都洛北や湖北の冬の山里を訪れ、その美しくも厳しい自然とその中の人々の暮らしを暖かい視線で描きました。冬の伊吹山の堂々たる姿を西方から見て描いた本作品もそのひとつで、一面の雪景色や前景の凍てついた池が冬の厳しさを感じさせる一方、生命力たくましい雑木林や、凍らずに残った鏡のような池の表面が、画面にほっと緊張感がゆるむような安らぎを与えています。寒色系に限定しないカラフルな色使いもそれに一役買っています。

⑰ 八島 正明 《旗の並ぶ日》

本作品の舞台は長浜市の、北国街道に沿った古い商店街です。現在は、旧第百三十銀行の保存を目的に1988（昭和63）年に設立された「黒壁スクエア」を中心とした町おこしに成功し、多くの観光客で賑わっていますが、本作品に描かれているのはそれ以前の衰退した人気の無い商店街で、昼とも夜ともつかぬ時刻、店の前に掲げられた巨大な旗にありし日の賑わいが幻のようによぎるといふ、寂寥の念と郷愁とが入り交じった不思議な光景です。まるで原爆投下時の閃光を思わせる、道の中央に落ちた街灯の影が不気味です。

⑱ 中路 融人 《深緑の島》

琵琶湖の北端近くに浮かぶ竹生（ちくぶ）島は、弁財天を祀る宝厳寺（ほうごんじ）と都久夫須麻（つくぶすま）神社が置かれた信仰の島です。寺社やみやげ物屋は島の南端に集中し、それ以外の場所はうっそうとした樹林に覆われています。ヘリコプターでも使ったのでしょうか、その竹生島を反対側である北側の上空から見た姿で描いたのが本作品で、冬の琵琶湖の凍てついたようなモノトーンと相まって、人間の気配をまったく感じさせない厳しい画面となっています。絶妙な立体感の表現が見どころです。

⑲ 齋内 一秀 《六月の頃》

棚田は傾斜地に階段状に造られた水田で、滋賀県では湖西地方に残るものが特に有名です。現在

はその美しい景観が評価され、自然と人間の共生の象徴として人気を集めています。本作品は天津市仰木(おうぎ)付近の棚田を描いたもので、一面の爽やかな緑色が目に鮮烈な印象を与えます。棚田が縦方向に長く伸び、遠景の竹林が雨に霞んでいることで、遠近感が強調されています。田植えが済んだ田とそうでない田が混在しており、当時の耕作事情が偲ばれます。

⑳ ^{たむら かずお ひらたせつ} 田村 一男 《比良多雪》

山の画家として知られる画家が、近江八景のひとつ「比良暮雪」を、縦長の作品《比良初雪》と横長の作品《比良多雪》という対照的な二枚に描いた、そのうちの一点です。一面の雪で覆われた厳寒期の比良山地を、琵琶湖の対岸である近江八幡市の方向から描いたもので、暗い湖面と重く垂れ込めた雲に挟まれて屏風のようにどこまでも横に延びる白い山嶺が、見る者に大自然のスケールを感じさせます。山の形は極めて正確に描かれており、右側のひときわ高い部分が最高峰の武奈(ぶな)ヶ岳です。

㉑ ^{いけだ ようそん ひよしさんきょう} 池田 遙邨 《日吉三橋》

天津市坂本の日吉大社は全国にある日吉神社・山王神社の総本社です。境内を流れる大宮川にかかる大宮橋、走井橋、二宮橋の三箇所の石橋は日吉三橋と呼ばれており、古くから多くの美術作品にその姿を確認できます。遙邨は画面を中央の雲で二つに分け、上部には上空からの鳥瞰(ちょうかん)視点で境内の遠景を描き、下部には夏の大宮川と日吉三橋を横方向からアップで描いています。現実の距離感や大小関係に囚われない自由な描き方が特徴的です。カラフルな色彩感覚も魅力的です。

㉒ ^{いさ としひこ つき みち} 伊砂 利彦 《月の路》

水面から昇る(あるいは沈む)月や太陽が水面に縦方向の柱のように反映を作る現象を、月光柱、太陽柱と呼びます。この作品は作者が、天津市柳ヶ瀬にかつて所在した旧琵琶湖ホテル(現在のびわこ大津館)近辺の湖岸から見た月の出と、それが湖面に作った月光柱に感銘を受けて構想したもので、型絵染のパターンを単純に繰り返しているものです。自然の息吹、リズムが感じられ、自然の迫力をそのままに様式化・抽象化して作品に仕上げる伊砂の実力が遺憾なく発揮されています。

■□■. 作家解説 ■□■

池田 道夫(いけだ みちお)

① 《琵琶湖朝輝》

大正14年(1925)京都府生まれ。父は文化勲章受章者の日本画家、池田遙邨(ようそん)です。京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)在籍中に招集を受けながらも戦後復学し、1948(昭和23)年に卒業。1950(昭和25)年の第6回日展に《工場》で初入選し、以後は日展を中心に活躍しました。はじめは父遙邨が主宰する画塾青塔社には参加せずに独自に研鑽を重ねましたが、1988(昭和63)年の父の没後は青塔社を引き継ぎ、その主幹として後進の指導にあたりました。洋画的な雰囲気を持った厚塗りの静謐な静物画を得意としましたが、夕日に映える極彩色の雲などを特徴とする幻想的な風景画や、その両者を組み合わせた作品も数多く描きました。2022(令和4)年没。

中路 融人(なかじ ゆうじん)

② 《瀬田夕映》 ⑥ 《風声》 ⑩ 《深緑の島》

1933(昭和8)年年京都市生まれ。幼い頃からしばしば母の郷里である滋賀県を訪れており、それが画家の原風景となりました。1952(昭和27)年京都市立日吉ヶ丘高校美術コース日本画科を卒業し、1954(昭和29)年山口華楊(かよう)が主宰する画塾晨鳥社(しんちょうしゃ)に入会。1956(昭和31)年の第12回日展に《残照》で初入選を果たします。絵を描き始めてから半世紀を超える歳月を湖国滋賀、特に湖北地方の風景を中心に描き続け、構築的な構図と重厚に塗られた色面でモニュメンタルに捉えて、荘厳な雰囲気を持った近代的画面に仕上げています。2001(平成13)年に日本芸術院会員、2012(平成24)年文化功労者。2016(平成28)年、東近江市の近江商人博物館に併設して中路融人記念館が開館しました。2017(平成29)年没。

仁志出 高福（にしで こうふく）

③ 《津田江の帰帆》

1926（大正 15）年、滋賀県野洲郡速野村（現守山市）生まれ。京都市美術専門学校（現京都市立芸術大学）日本画科を卒業後、画塾農鳥社（しんちようしゃ）を主宰する京都画壇の花鳥画の巨匠、山口華楊（かよう）に師事しました。現在は天津市に住み、主に日展を中心に農鳥社展や日春展などに出品を続けています。また天津市伝統芸能会館能楽ホールや東京都渋谷区にあるセルリアンタワー一能楽堂の鏡の松（鏡板に描かれる老松の絵）なども制作しました。絵具の厚塗りを生かした、力強いタッチの叙情的な風景画を多く描いています。なお長男の仁志出龍司も日本画家です。

川島 浩（かわしま ひろし）

④ 《野洲川》

1910（明治 43）年京都市伏見区生まれ。京都絵画専門学校（現京都市立芸術大学）在学中に、京都画壇における動物画の大家である西村五雲と、その弟子の山口華楊（かよう）に師事しました。1932（昭和 7）年の第 13 回帝展に《大和の麦秋》で初入選。以後帝展、新文展に入選を重ね、戦後もその系譜を引き継ぐ日展に出品を続けて、1983（昭和 58）年には日展会員となりました。1988（昭和 63）年に京都府文化賞功労賞を受賞、同年京都市文化功労者となりました。山中にある湖や湿原など水のある風景を題材に、シンプルで計算された構図と色彩表現による、スケール感と情感に溢れた風景画作品を多く描きました。1994（平成 6）年没。

沢 宏毅（さわ こうじん）

⑤ 《近江富士》 ⑬ 《古里の山》

1905（明治 38）年、現在の滋賀県長浜市に生まれます。本名日露支。京都画壇の重鎮西山翠障に師事し、同門の女流日本画家秋野不矩と結婚（後に離婚）。戦前は繊細なタッチで叙情的な風俗画や花鳥画を多く描いたが、戦後は上村松莖や山本丘人らと創造美術（現、創画会）の設立に参加。戦前とは違って変わって洋画的な厚塗りをを用い、装飾的で半抽象的な独特の風景画を描くようになりました。昭和 30 年代には無骨かつ荒々しい画面の作品群を制作。昭和 50 年代からは重厚で幻想的、象徴的な作風に移行し、独自の境地を開拓しました。縦長で左右対称を基本としたその画面は、宗教画のような荘厳さとヨーロップの北方ロマン派風景画に似た厳しい寂寥感を漂わせなが

らも、大自然の暖かさも感じさせます。最晩年は伊吹山など、故郷である湖北の冬の風景を叙情的に描きました。昭和 57 年（1982）没。

野添 平米（のぞえ へいべい）

⑦ 《鎌掛溪谷図》

明治 28 年（1895）、滋賀県栗田郡下笠村（現在の草津市下笠町）生まれ。最初京都の四条派の画家菊池芳文に、大正 7 年（1918）の芳文の死後はその娘婿の菊池契月に師事し、翌年の第 1 回帝展に初入選。以後帝展に出品を続け、昭和 7 年（1932）の《奥山の朝》で特選となりました。昭和 15 年（1940）の紀元二千六百年奉祝美術展に招待出品。戦後は日展等の団体展から離れて、京都市美術展などに作品を発表しました。また京都小御所や大徳寺瑞峯院の襖絵なども手がけました。作品は風景画が多く、四条派の伝統を受け写生を踏まえた明るく端正なタッチで、雄大に描き上げるところに特徴があります。昭和 55 年（1980）没。

野口 謙蔵（のぐち けんぞう）

⑧ 《五月の風景》

明治 34（1901）年、滋賀県蒲生郡桜川村綺田（現・東近江市綺田町）に生まれました。伯母に明治時代に女性日本画家として人気を博した野口小蘋がおり、文化的な環境のなかで育ち、幼い頃から絵を描くことを好みました。大正 8（1919）年に彦根中学校から東京美術学校西洋画科へ進み、和田英作に師事。以後生涯を通じて和田を師と仰いでいます。大正 13（1924）年、東京美術学校を卒業すると同時に故郷の綺田へ戻り、一時期本格的に日本画を学ぶなどして独自の洋画の様式を探求しました。昭和 3（1928）年の第 9 回帝展に初入選、おおらかな線描と大きな色面によって日本の風景を描く自身の画風を確立させました。昭和 9（1934）年に東光会を結成、創立会員として後進の指導にあたりました。昭和 18（1943）年に発病、翌昭和 19（1944）年に 43 歳で亡くなりました。生涯にわたり故郷蒲生野の風物を描き続けました。

茨木 杉風（いばらぎ さんふう）

⑨ 《湖畔の街》 ⑩ 《湖畔》

1898（明治 31）年に滋賀県近江八幡市の海産物問屋梅田屋の茨木芳蔵の長男として生まれました。本名、芳太郎。県立八幡商業学校を卒業後、1918（大正 7）年に日本美術院の大林千鶴樹を頼り上京します。1920（大正 9）年には千鶴樹の紹介で近藤浩一路に師事し、太平洋画会研究所に入学し

ました。1922(大正 11)年第 9 回院展に《八木節》が初入選、その後 1930(昭和 5)年に日本美術院院友となります。1937(昭和 12)年 9 月に日本美術院が新文展に参加するようになると、在野精神を貫徹するため日本美術院を脱退し、元日本美術院院友の同志 9 名と共に新興美術院を結成、伝統にとらわれない自由な創作を目指しました。杉風は特に水墨画で本領を発揮し、写生に基づいて故郷である湖国滋賀の風物、特に近江八幡の景色や琵琶湖の風景を描き続けました。1976(昭和 51)年没。

島戸 繁(しまと しげる)

⑪《湖畔夕照》 ⑫《彦根城(玄宮園)》

明治 35 年(1902)滋岐阜県伊自良村生まれ。父が竹内栖鳳門で伊川(いせん)と号し、教員のかたわら制作を行っていた京都で育ちます。病を得て中学を中退し郷里へ戻るも、大正 10 年(1921)京都で教員の職を得るとともに、森脇忠にデッサンを学ぶようになり、のちに太田喜二郎から本格的に油彩画を学びました。昭和 2 年(1927)県立中学校赴任を機に滋賀県に移住。昭和 8 年(1933)より彦根市に居を構え、洋画研究グループ「青湖会」を結成して、現職の図画の先生や同好者の指導、研究会、講演会等を開催、積極的に地域活動を行います。昭和 5 年(1930)第 11 回帝展で《夜明けの沼》初入選。戦後は日展で活躍。昭和 32 年(1957)光風会会員に推挙されました。平成 10 年(1998)没。

小林 翠溪(こばやし すいけい)

⑬《金亀城址の秋》

1902(明治 35)年京都府舞鶴市生まれ。1918(大正 7)年叔父の紹介で滋賀県膳所町(現大津市)に移り、同地に住んでいた京都画壇の大家山元春拳が主宰する画塾、早苗会に入りました。山元春拳の別邸「蘆花浅水荘(ろかせんすいそう)」に住み込み師匠の動向を常に観察できる環境にいたためか、毛筆による写生画法の名手であった春拳の技法を門人の誰よりも濃く引き継ぎ、1928(昭和 3)年には師の推挙により久邇宮(くにのみや)邸の天井画を描くなど、早くから頭角を現しました。作品は写生を元にしたみずみずしい感性の風景画が主で、師とは異なり滋賀の風景も多く描き残しています。1955(昭和 30)年没。

中村 善種(なかむら よしたね)

⑭《冬の倒影》

1914(大正 3)年和歌山市生まれ。1938(昭和 13)

年に和歌山師範学校専攻科(現和歌山大学教育学部)を卒業、この年の第 8 回独立美術協会展に《カナと糸杉》で初入選し、同協会会員の森有材に師事しました。以後も独立展への出品を続け、1949(昭和 24)年に独立美術協会会員となりました。この頃は象形文字などをヒントにした土俗的な抽象表現を試みています。京都に住み、京都市立芸術大学教授や大手前女子大学教授などを務め、京都府文化賞、京都市文化功労賞、和歌山市文化賞などを受賞。都会の一隅の情景や忘れられた事物をモチーフに、虚実を織り交ぜながらリズムを通して見たような幻想的な空間を構成し、現代的な心象風景に仕立てるのが特徴でした。1995(平成 7)年没。

安田 謙(やすだ けん)

⑯《雪景伊吹山》

京都市生まれ。本名、謙三郎。1929 年(昭和 4)京都市立美術工芸学校図案科(現、銅駝美術工芸高校)を卒業し、翌年美術団体各人社を結成。1933 年(同 8)独立美術京都研究所創立に参加、須田国太郎に師事しました。1935 年(同 10)第 5 回独立美術協会展に初入選。第 1 回京都市展で受賞。大陸へ写生旅行。1939 年(同 14)二度の応召により制作を中断。1946 年(同 21)第 2 回京展に入選以降、京展審査員を務め、翌年、独立美術京都研究所を再建。1952 年(同 27)《工房》《魚市場》で独立賞を受賞。1960 年(同 35)同会会員。「馬」シリーズや「ドン=キホーテ」シリーズのほか、細密描写による写実的な静物画を得意としました。1963 年(同 38)以降度々欧州を訪れました。1970 年(同 45)京都市立芸術大学教授となり後進を指導。京都府美術工芸功労者で京都市文化功労者。

八島 正明(やしま まさあき)

⑰《旗の並ぶ日》

1936(昭和 11)年、現在の三重県いなべ市に生まれました。終戦直後 2 歳の妹を栄養失調で亡くしたこと、そして広島市の平和記念資料館で原爆の熱線に焼き付けられた人間の影を見たことが、戦争をはじめとする世の不条理に傷つく人々の痛みと孤独を描く、彼独特のスタイルを決定しました。キャンバスに白い下地を作った上に黒い絵具を重ね、割り箸にはさんだ木綿針で丹念に黒い絵具を削ぎ落としてゆく手法で、実体感を喪失した影のような姿や荒涼とした風景をモノクロームで描きます。中学校の教員を勤めるかわら、シュールレアリスムの傾向が強い美術文化協会に所属して制作を続けました(2001(平成 13)

年退会)。1975(昭和50)年に第18回安井賞を受賞しています。

田村 一男(たむら かずお)

⑱ 《比良多雪》

1904(明治37)年東京生まれ。岡田三郎助が主宰する本郷絵画研究所で洋画を学び、1928(昭和3)年の第9回帝展に《赤山の午後》で初入選。1931(昭和6)年の光風会展に《松の木風景》など3点が入選。以後、日展と光風会展を中心に活動し、1969(昭和44)年に日展理事、後に参事、顧問を務めました。1992(平成4)年に文化功労者になりました。一貫して山岳風景画を描き「山の画家」と呼ばれましたが、その作風は初期の写実的なものから徐々にシンプルな構成と深い色彩を特徴とする独自の象徴的表現へと深化してゆきました。なお長野県の松本市美術館には田村一男記念展示室が置かれ、アトリエが再現されています。

齋内 一秀(さいうち いっしゅう)

21 《六月の頃》

1910(明治43)年東京生まれ。後に京都に出て京都画壇の巨匠山元春挙に師事し、円山派を修得しました。春挙の画塾早苗会に所属し、春挙の没後は早苗会を引き継いだ川村曼舟に就いて学びました。後に山口華楊(かよう)にも師事し、彼の画塾「農鳥社(しんちょうしゃ)」に籍を置きました。1941(昭和16)年の第4回新文展に山岳を描いた《翠巒(すいらん)》で入選、翌年の第5回の新文展に滋賀湖西の風景を描いた《六月の頃》で連続入選を果たしました。戦後も日展などに入選・受賞を重ね、山水画・花鳥画を得意として京都画壇で活躍しました。明るい色彩による素朴派的で平明な表現に特色があります。

池田 遙邨(いけだ ようそん)

⑲ 《日吉三橋》

1895(明治28)年、現在の岡山県倉敷市に生まれました。本名昇一。父の転勤に伴い大阪に転居後、洋画家松原三五郎の天彩画塾に入り、1914(大正3)年文展に初入選。1919(大正8)年、同郷の日本画家小野竹喬のついでで京都に移り、竹内栖鳳に入門し日本画に転向します。同年の第1回帝展に入選。以後新文展、日展を通じて官展系画家として活躍します。この頃ムクやゴヤに傾倒し、内面的で暗い表現に変わりますが、関東大震災を題材にした《災禍の跡》が1923(大正12)年の帝展に落選したことで倉敷に帰郷、寺に隠れて画作の研鑽に励みます。その後は南画の富田漢仙、浮世絵の歌川広重に影響を受け、また大和絵や南宋画の研究も重ねたことで、飄逸で機知と詩情に溢れた独自の画境を開拓。全国を旅して自然と旅をテーマに画作を行いました。晩年は俳人種田山頭火の句を題材にした連作でも知られます。1976(昭和51)年日本芸術院会員となり、1987(昭和62)年文化勲章を受章。昭和63年(1988)没。

伊砂 利彦(いさ としひこ)

⑳ 《月の路》

1924(大正13)年京都市中京区生まれ。実家は三代続いた友禅染の糊置き業でした。京都市立絵画専門学校(現在の京都市立芸術大学)図案科を卒業後、家業の染色に従事しますが、戦後の失業者対策事業の一環で友禅染を元来の分業ではなく一貫作業で行う工房の経営を任せられ、染色の複雑な工程や技術を身につけました。初期は蠟纈(ろうけち)染を制作していましたが、稲垣稔次郎の影響を受けて型絵染へと移り、また伊砂が参加した新匠会の主宰者富本憲吉の「模様から模様を造らず」という言葉に感銘を受けて、自然の観察と写生を踏まえつつ、松、水、音楽や海などをテーマに幅広い作品を制作しました。2010(平成22)年没。

小倉遊亀は、文豪谷崎潤一郎の小説『少将滋幹の母』『細雪』の挿絵を手がけています。挿絵は、小説の読者に対して、物語の世界を絵画化することにより、視覚的にも楽しんでもらうという大きな役割があります。その一方で絵画作品としても、物語の場面を次々に捉えたストーリー性豊かな一群は、ドラマティックで見応えが感じられます。本展示では、『少将滋幹の母』『細雪』の挿絵と、絵の中に「物語性」を感じさせる人物画3件を展示します。

《童女》

おかつぱ頭の少女がそら豆の皮を外しています。目を細め、はにかんだような表情が印象的です。背景は白く、具体的な風景は描かれていませんが、正座をしている少女の膝元と周囲の豆の位置関係から、描かれているはずのない床面が絵画空間のなかに想像できます。本作が描かれた1938(昭和13)年、遊亀は小倉鉄樹と結婚。翌年には教員と画家の二重生活を終え、以降画業に専念しました。第4回九阜会展出品作。

《春日》

洋装と和装の女性が向かい合って立ち話をしています。随分と会話が弾んでいるのでしょうか。楽しそうな大人たちを尻目に、赤い着物の女兒は右手に持った椿の花に夢中です。しかしよく見ると女兒の左手の人差し指は、母親と思われる後ろ姿の和装の女性の小指に引っ掛けられています。愛らしい仕草が微笑ましい、和やかな春の日の一場面です。本作は、東京の日本橋高島屋で開催された青丘会第4回展に出品されました。

《夏の客》

第29回院展に出品したのは二面一組で、本作はその右側(左側はウッドワン美術館所蔵)。夫の鉄樹居士の見舞いに訪れた客人に想を得て、客を迎えて対座する場面を描きました。本作の女性は煙草盆を脇に置いて丸髷に結び、粹に襟を抜いた藍色の浴衣姿、団扇を手に行っている年増です。左側に描かれている客は赤縞の着物に扇子を持ってパーマをかけた細身のモダンな女性であり、対照

的です。写実的な描写に主眼はなく、ちょっとした瞬間の動きを描こうとしたという画家の言葉どおり、人物の顔の形やポーズ、たつぷりとった余白に意図的な工夫が感じられます。人物はおおよそ三角形に収まるフォルムで形成され、その傾き加減で、二つの三角形が呼応し合っているように見えます。このことが二人の間のくつろいだ空間を演出しています。

《少将滋幹の母 挿絵・口絵・カット他》

1949(昭和24)年11月から翌年2月まで、毎日新聞に連載された谷崎潤一郎の小説『少将滋幹の母』。遊亀は本作の挿絵を担当しました。当館に収蔵されているのは、モノクロ刷りの新聞紙面に掲載された白描画(墨の線で描かれた絵)84面、初版本の口絵用に彩色で描かれた3面、そしてカット図版などを集めた2面の計89面です。平安時代が舞台の小説の挿絵制作にあたり、遊亀は古い時代の美術作品を学び、参考にしました。

《細雪 挿絵》

谷崎潤一郎の代表作でもある小説『細雪』の挿絵です。小説は1943(昭和18)年から1948(昭和23)年にかけて執筆されましたが、本挿絵は1970(昭和45)年に河出書房新社から刊行された単行本のためにカラーで描き下ろされました。遊亀が谷崎作品の挿絵を手がけるのは、1949(昭和24)年から翌年にかけて新聞連載された『少将滋幹の母』以来2作目です。戦前の大阪、船場の旧家の四姉妹を中心に繰り広げられる人間模様を描いています。